

初めて在りし日の父をはっきりと

感じとることができました

(第一回慰霊祭に参加して)

四期 上野六十男

遺児 上野 紀子

上野 宏子

父が第一次ブーゲンビル島沖海戦とかに、指揮官機の操縦員として散華した時、姉は一年十ヶ月、私はまだ母の胎内にあった。昭和二十三年、母が他界した時、姉は六歳、私は四歳であった。だから、私には母のことならいくら記憶に残っているが、父の姿は思い出しようもなく、ただ残された写真や日記帳で面影を偲ぶだけであった。

相次いで父母を失った私達姉妹は、祖父母、叔父、叔母の庇護の下に互いに援け合い、より添って心の暖をとりながら、小学校・中学校・高高等学校を終え、奇しくも二人とも父にゆかりの自衛隊に職を奉じることになったのである。

昭和四十一年五月二十七日、この日が生涯忘れられない日になるうとは思ひもかけなかった。正直に言って、祖母がはるばる札幌からやって来て、慰霊祭に出席しようと誘われた時、私たちはあまり気がすまなかった。というのは、通りいっぺんの慰霊祭にすぎないだろうと

思い込んでしまっていたからであった。ところが、あの晴れわたった青空の下で、除幕された像を仰ぎ、高松宮両殿下をはじめとする来賓の方々のお言葉をじつとかみしめていくうちに、父の死の意義もはっきりとうなづかれ、また、私たちと同じ運命を負った方たちが全国にこんなにも沢山いられることを知って力を得、心から慰められた。

さらに、予科練習生であった父の同期の方々の会合に招かれて、私たちは今まで湧いたことのない、感激を味わった。初対面の同期の方たちの話が何故こんなに私たちの心を打ったのだろう。辛抱強く生きることにならされた私たち、めつたに涙など出したことのない私たちは、何度か頬をぬらした。同じ時代の喜びと悲しみを経験し、思いを一つにして国のために戦って来られた方々の言葉の一つ一つに、筆舌につくしがたいものが感じられた。同期の方々の言葉で、私たちは生まれて初めて在りし日の父をはっきりと感じることができた。この方々と生活を共にし、手をとり合い肩を組み合い、語り合って、父は生きていたのである。そう思うと、今にもあの豪快な父が現れそうな、そんな気がしてならなかった。でも、やはり、父はいないのだ・・・

会が終わりに、寮に帰ってあの盛大だった大会を思い出す度に、なつかしさと淋しさがひとし

お身をつつむのである。

戦いはもうこりごりだ。しかし戦ったその頃の人たちの心を思うとすばらしいと思う。私たちもその頃の父の年齢に近いが、いまその年齢の人たちはただ何事も自分本位にのみ考えて行動しがちなのに、あの頃の若い人たちは人を信じ、国を愛し、死の最後まで疑うことがなかったのである。そして、偶然に生き残った人たちも昔と少しも変わらず、人を信じ戦友を愛して、二十年以上たった今日でも昔のように意気盛んで、仲良く純粹に生き続けているのである。天涯の孤児のようにひとり合点して、ひそひそ生きてきた私たちは、同期の方々の励ましと父の面影の再生によって、急に世の中が明るくなり、広くなったような気がして、力強い思いに満たされている。

(昭和四十二年四月五日号掲載)

